



Title	《傾斜》する記憶：『斜陽日記』／『斜陽』試論
Author(s)	小澤，純
Citation	太宰治スタディーズ. 2006, 1, p. 89-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97259
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《傾斜》する記憶——『斜陽日記』／『斜陽』試論

小 澤 純

はじめに

「あ。」と、「お母さま」が「幽かな叫び声」をあげる。そのとき、『斜陽』は開始される。しかし同じ朝食の席、続いてかず子が「あ。」と口にした後の会話では、すでに「幽かな」ずれが垣間見られる。

「お母さまも、さつき、何かお思ひ出しになつたのでせう？　どんな事？」／「忘れたわ。」／「私の事？」／「いいえ。」／「直治の事？」／「そう、」／と言ひかけて、首をかしげ、／「かも知れないわ。」／とおつしやつた。

(一章)

かず子は、「何か、たまらない恥づかしい思ひに襲はれた時に、あの奇妙な、あ、といふ幽かな叫び声が出るもの」と考え、「お母さま」

の「あ。」を、こうして「終戦になつても行先が不明」な弟・直治へと結び合わせる。しかし、「お母さま」がかず子に導かれて曖昧な受け答えをする前に、「忘れたわ。」と口にしたことをまず問題にしたい。「幽か」でしかない「あ。」は、かず子の矢継ぎ早の言葉のために掻き消えてしまつたが、何かを「忘れた」という痕跡そのものは、残り続けるのではないか。二章でかず子は、終戦直後の新聞に載つた「昨年は、何も無かつた。／一昨年は、何も無かつた。／その前のとしも、何も無かつた。」という詩を二度も繰り返し、「戦争の追憶は、語るのも、聞くのも、いや」で、徴用されたときの「ヨイトマケ」だけが唯一の「たのしい記憶」だと記す。(だがその「貴重な体験談」の中にも、「私は、ふとあの若い将校を、前にどこかで見たけた事があるやうな気がして来て、考へてみたが、思ひ出せなかつた。」という「一節が紛れ込む。')そして三章で復員する直治もまた、

「何も無い。何も無い。忘れてしまった。」と嘯くのである。

こうした幾重もの《忘却》の底からは、大文字で戦中／戦後という単線的な区切りを引くことに抗う多声的な《記憶》が、反転した形で噴出しているのではないだろうか。山崎正純は、「戦時との《断絶》の想定によって生成」する「戦後民主主義的言説」のただ中で「戦時からの《連続》」を生きたかず子と、「配給された自由」を拒絶する直治の死を分析する。また丸川哲史は、『斜陽』のテーマが「失われてしまった『何か』、損なわれてしまった『何か』を如何に想起するか」にあり、「あ」は、「過去の潜在性の絶対性を主張するもの」だと論じた。⁽²⁾それは「突然訪れる想起によって私たちの身体が記憶の中へ丸ごと放り込まれる」ことを意味するが、かず子たちは、そうした「過剰」な過去の《記憶》に強く曝されつつも、《忘却》を媒介に過去からの《連続》を再認識し紡ぎ直すことで、捏造された《断絶》に亀裂を走らせながら、それぞれの現在を占めていくのではないか。それは、大文字で語られる言説と唐突な過去の到来との両極に挟まれながら、安定しえない動態において言葉を紡ぎ行為することである。⁽³⁾本稿では、まず太田静子『斜陽日記』との差異を糸口に、『斜陽』に遍在する《忘却》のあわいで自らを触発し紡ぎ出しているかず子の行方に焦点を当て、その錯綜した《記憶》の生のありようについて考察したい。

一 美しい「ブランク」

『斜陽』が発表された直後の反応から、問いを立てていきたい。例えば須多章は「貴族転落という階級的没落の歴史性や、そのモメントで自覚する娘という風には全然とりに上げない」が、形式の「古めかしさ」のうちに「日本の社会自体の歴史的位位置を作者が不識の中に象徴している」とし、香川明は「この戦争に傷ついた人間たちが絶望と頹廃と孤独を貫いて、なを美しい愛を失はずに生きる姿」を「戦争の犠牲者の一人である没落階級の家族に見ようとする」、「或る程度象徴的」な「社会批判」であると論じる。⁽⁵⁾

こうした同時代性を指摘する評は散見されるが、そのうえで小説全体の構成に破綻を見るものも少なくはない。伊藤整は「反自然的」な構成に「着想のうまさ」を見ながら、「印象が分裂」していると暗示し、「各細部は平面的なアラベスクであるが、それが生きた層をなして、印象の有機的な、つまり作品が一個の生命^{マヤ}なつて集中するといふその集中性に欠けてあると思ふ」と難じた。⁽⁶⁾確かに『斜陽』はかず子の手記の他に複数の手紙や直治の日記・遺書が引用され、また出来事の前後関係が複雑に錯綜する。しかしその「分裂」が刻まれた「アラベスク」こそ重要ではないだろうか。ここで伊藤の評と同月に掲げられた神西清「斜陽の問題」⁽⁷⁾を参照したい。

「……」話はむしろ音楽の畑になるんだが、実をいふと僕はあの『斜陽』を二度三度と読んで、モーツァルトの或る種の楽曲が思ひだされてならなかった。「……」さうしてあの四重奏にききとれてゐるうちに、どこからともなく——それはひよつとすると、大分ひびの入つてゐる窓ガラスを色がみか何かで張りふさいだその隙間から、冬風とともに忍びこんでくるのかも知れないがね——まるで古い記憶の底から浮びあがつて来でもするやうに、同じモーツァルトの例へばあのト長調のフリーユート協奏曲か何かの調べが、とぎれがちに、しかもまつわりつくやうに、忍びやかに聞えてくるのでなくてはならん。……だが君、これは断じて回顧趣味でも何でもないんだよ。まさしく今日なんだ。今日この時の東京には、いや日本には、さういふ時がまさに存在するんだよ。まぎれもなくそれは、われわれの「自然」の一部なんだよ。しかも或る深さと拡がりを具へてゐるところのね。

神西は、『斜陽』に散らばる「集中性に欠け」た「各細部」が、いわば音楽におけるメロディの持続のように「深さと広がりをも具へ」ながら「今日」へと流れ込んでくる構造を捉える。しかも「古い記憶の底」から洩れ出す別の楽曲は、「回顧趣味」ではなく「今日」の「われわれの「自然」の一部」であると述べるのだ。これらの同時

代評から浮かび上がる『斜陽』の「今日」とはいかなる現在なのか。そこでプレテクストである太田静子『斜陽日記』との比較を通し、『斜陽』における現在の再構成の意図を考えていきたい。

『斜陽日記』の内容が『斜陽』の第五章までと対応していること——つまり「お母さま」の死までであり、蛇の卵を焼くエピソードなど文体まで酷似している場面があることはよく知られている。しかし著しい改変もあり、小森陽一が指摘するように「太平洋戦争末期から「敗戦後」にかけての読書日誌から浮んでくる、自己形成にかかわる言葉の系譜」を、「勤労奉仕のエピソード以外は、すべて「敗戦後」のこととして位置づけなお」したことは重要である。また坪井秀人は、『斜陽日記』での兄・馨と静子との「敗戦」直後の対話などから「転向する男たち」と伝えていく女」という構図を見出し、「戦争が終わってこれから民主主義だ、お前のようなことを言っているといつていけないぞ、と兄は言う」が、「静子はむしろ敗戦の聖なるその瞬間に殉じようとしている」と分析する⁽⁹⁾。

遡れば、「その夜、九時頃、空襲警報が鳴つた。不気味な感じの夜で、敵機は何機にも分れて侵入して来て、関東各地を空襲してゐた。」など、戦時下の描写が鏤められ、「原子爆弾以来、相模湾に一機偵察に来て、誰もが死の恐怖にふるへた。」という状況を経て、「無条件降伏のことを同つて、その夜は興奮して眠れなかった。それは信

じられないことだった。お国が減びるのだと思うと、悲しかった。」と、戦時から戦後へのパースペクティヴが具に追われているのである。そして、「国体は変るぞ。」と口にする馨に対し「変らない。」と主張したため、「お前みたいな人間には、これから、おそろしいブランクがやつて来るよ。」と罵られるが、静子は「お兄さま、ブランクって何のこと？私のこころは、そんなブランクにとらへられる訳はありません。」と切り返す。

ここで注意したいのは、『斜陽日記』ではある種の昂揚によって記された「敗戦」の瞬間が、「敗戦後」から始まる『斜陽』ではそもそも思い出されもしないことだ。いち早く「無条件降伏」の事実を伝えにやって来た「加来氏」が「支那間のテエブル」を叩いて「喜劇です。私の人生の終りは喜劇です。」と嘆じる劇的な場面さえもが失われる。（先取りすれば、『斜陽日記』では「敗戦」の瞬間とともにその「喜劇」が封じられるのに対し、『斜陽』における「マイ、コメデアン」という「喜劇」に纏わる言葉は、不在の相手への「最後の手紙」の末尾に用いられ、受け取られたかどうかとも分らないまま現在への「ブランク」を漂っていくことになるのだ。）

そうした《忘却》に留意しながら、『斜陽日記』に書き綴られた戦中／戦後を考えていきたい。静子には戦時下の《記憶》がすでに密に書き込まれているために、馨が口にした戦後の「ブランク」（無記

入・余白）に對して、決して翻弄されたりはしないだろう。だが、「空襲」をはじめ戦時下に母・娘で培った日記体の《記憶》は、例えば静子が「戦争に敗けて、国がなくなつても、美しいものが滅びることはない」と「お母さま」に伝えたような、すでに閉じられた戦前からの「美しいもの」を単に綴じていくものなのではないのか。それは「ヨイトマケ」以外すべてを「ブランク」（空白）として《忘却》したかず子とは、すでに「敗戦後」開始の時点で対極をなすものであろう。そして静子は戦後も「美しいもの」をいつまでも《記憶》し続ける――

お座敷に行つて、お母さまの顔に、蒸しタオルを当て、口の中を、ガーゼで、きれいにふいてあげた。そして、髪をといてあげた。お母さまは、／「小ひさい、小ひさい時のことを思ひ出した。」／と仰つしやつた。私は櫛をおいて、小ひさい子供の髪の毛を撫でるやうに、お母さまの髪の毛を撫でてゐた。／お母さまは、／「顔ばかりきれいにしても仕方がない。」／とお笑ひになつた。

これは「お母さま」の死の直前のエピソードだが、「小ひさい時」の追憶へと、母・娘が未分化のまま遡っていくかのようであり、過

去の「美しいもの」への恋着が極まっている。そして「お母さま」の「お死顔は殆んど変わらな」いまま、「いつとはつきり、分らぬくらひ」に息絶えていく。——「いつまでもお母さまの横顔を眺めてゐた。」と閉じられる『斜陽日記』は、いわば静子と「お母さま」を「いつまでも」過去において一体化させている。

こうした傾向をより際立たせるのは、「書くこと」をめぐる様相の違いである。『斜陽』の「お母さま」は徹底して声だけの存在であり、かず子は書く行為によつて「お母さま」との差異を作り出してゐるとさえ言える。だが『斜陽日記』の「お母さま」は、静子の俳句を褒め「二人してつくつたことにして置きませうね。」と提案し、「詩箋に三つの句を書いて、封筒に入れて、「きさ、しづ子」とお書きになつて、御父上の御写真の前にお置きにな」るのである。さらに『斜陽日記』には「お母さまの日記」が引用されている。それは「昭和二十年の元旦」のものだが、「やがて子供達、にこにこして、おめでたうございます、とあそびに来る。羽根をついたり、お手玉をしたり、子供たちと、ひねもす子供のやうな気持ちにて、あそびくらす。何事も忘れて……。」と書き写され、それを受けて静子も「何事も忘れて」とあるやうに、お母さまは、しよつちゆう、戦地にある二人の子供のことを思つていらつしやつた。殊に別れて四年にもなる遠い南の島にゐる通のことは、夜、昼瞬時もお母さまの胸か

ら消えることはなかつたのである。子供のことも忘れて、お母さまは、幸福な元旦を、全く無邪気な子供にかえつてお過しになつたのである。」と傍らに記す。静子においては、書く行為にまで「お母さま」が侵蝕しているのだ。しかし「書くこと」について見逃せないのは、その直後に続くエピソードである。

或朝、ふとお習字の手をやめて、／「お習字つてい、ものね。通に逢へないことだつて、だんだん忘れて行く。」／と、仰つしやつた。／「お母さま。いまにひよつこり帰つて来るかもしれません。飛行機に乗つて。」／と私は言つて、こんな場面を描いた。B 29が下の田圃のなかへ不時着して、そのなかに捕虜かなにかで通が乗つてゐる。〔…〕通は、お母さまに抱かれる。赤ちやんのときのやうに。

ここで「お母さま」は、自らの現在を「忘れて行く」ために書いているのだ。また先ほどから散見されるやうに、『斜陽日記』には大人を「子供」や「赤ちやん」などに擬する表現が目立つ。例えば静子が「お母さま」に叱られたとき「幼い日の感覚がよみがえつて来て、甘いかなしみが込みあげ、その「永いこと聞かない声」を聴きたくて無意識のうちにさらに怒らせようとする。それは、現在の「忘

却』によって、閉じられた「永い」追憶へと向かわせることだ。『斜陽日記』とは、静子と「お母さま」によって書き綴られていく、過去へと向かう『記憶』の「美しい」集積地なのだといえよう。これらの『忘却』への恋着は、「敗戦」を貫く現在の反作用として、母・娘に反復し、「お母さま」の死で綴じられているのだ。

では、『斜陽日記』から改変された『斜陽』には、「書くこと」を媒介にして、いかなる《忘却》と《記憶》が構造化されているのだろうか。

二 「あ。」の埋葬

『斜陽』における「書くこと」は、まずかず子一人によって特権化されている。島村輝は、かず子がいかに「自覚的」であり、「書く」という行為そのものがこのテキストにおいて果たしている役割の大きさを読者にほめかしてもいる」と指摘する。⁽¹⁰⁾そしてかず子が直治の「夕顔日誌」や遺書を書き写すことによって、「彼女自身の身体性を重ねていく」という解釈は示唆的である。ただその中でも、一章は過剰にかず子の「書くこと」への自己言及が際立っている。よって、まず一章に限定したうえで、かず子の書く行為が、どのような役割を担うのかを考察したい。

はじめに触れたように、一章は「お母さま」の「あ。」から始ま

る。しかしかず子の「髪の毛？」という問いに対して、すぐに「いいえ。」と否定の言葉が返ってくる。次にかず子から「あ。」と口にしたときも再び「いいえ。」と返し、その後も「伊豆へ行きたくなくなつたの？」や「ご奉公つて、女中の事？」の問いにも、「お母さま」は「いいえ。」を繰り返していく。『斜陽』全体を通して、この母・娘の会話は、『斜陽日記』と比較すれば明らかに二人のディスコミュニケーションを強調している。そして前半は、「お母さま」がかず子の言い当てを否定するものが多いのだ。しかもかず子の問いは「お母さま」から最後まで答えを得られなかったり迂回されたりしながら、そのまま会話は途切れていくのだ。

しかし、そうした亀裂含みの会話を継ぐように、かず子は別のエピソードを余白に書き連ねていく。冒頭の「いいえ。」の後は、かつて弟の直治が「言つた事」を書き始め、その言葉を媒介にして、かず子自身と「お母さま」がいかに違うかを確認する。そして「お母さま」が「ほんものの貴婦人のさいこの一人」という考えを「脱線」しながら記した後には、「さて、けさは、スープを一さじお吸ひになつて、あ、と小さい声をお挙げになつたので、髪の毛？」とおたづねすると、いいえ、と答へになる。」と、冒頭では会話体だったものが、かず子の書く地の文へと吸収されているのだ。そして、次にかず子が「あ。」と口にし、「お母さま」が「なに？」と問いかけた

ところで会話の描写を中断し、先ほどと同様に、地の文の中で出来事が反復される。

「……」何か、たまらない恥づかしい思ひに襲はれた時に、あの奇妙な、あ、といふ幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうつと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思ひ浮んで来て、たまらなくなり、思はず、あ、と言つてしまつたのだが、お母さまの場合は、どうなのだらう。まさかお母さまに、私のやうな恥づかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

(一章)

「あ。」が「あ、」として地の文に取り込まれ、「恥づかしい思ひ」や「恥づかしい過去」へと接続されていく。(誤記かもしれないが、その可能性も含めて、原稿・初出では「お母さま」が二箇所とも「お母さん」という、心的距離の近い呼称で書かれることに注意したい。)そして中断していた会話が「書くこと」においても再開し、かず子は「お母さま」の「あ。」の原因を「直治の事」へと導き、地の文に「お母さまは、スープを一さじ吸つては直治を思ひ、あ、とおつしやる。」と書き記す。

重要なのは、「お母さま」の「あ。」は、「いいえ。」や「忘れたわ。」

といった否定や「ブランク」を挟み、決してかず子の発した「あ。」とは一致しないにも関わらず、かず子の書く行為の中では徐々に「あ、」という同じ文字の裡に絡め取られていることである。不在の直治の言葉を書くことで「ほんもの」である「お母さま」像を立ち上げつつ、同時に「直治の事」に「お母さま」の「恥づかしい過去」を還元することで、かず子は「お母さま」の「あ。」に纏わるあらゆる過去の「深さと広がり」を《忘却》したのだと言つていい。それは一章の終わり近くでより顕著になる。

「……」ああ、かうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおつしやつたやうに、いちど死んで、違ふ私たちになつてよみがへつたやうでもあるが、しかし、イエスさまのやうな復活は、所詮、人間には出来ないのではなからうか。お母さまは、あんなふうにおつしやつたけれども、それでもやはり、スープを一さじ吸つては、直治を思ひ、あ、とお叫びになる。さうして私の過去の傷痕も、実は、ちつともなほつてゐはしないのである。

ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。この山荘の安穩は、全部いつはりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思ふ時さへあるのだ。

(一章)

ここですでに、「一さじ吸つては」と反復性が示され、そのたびに「直治を思」い出している「お母さま」が形象化されている。そして、その「お母さま」が発する「あ、」は「私の過去の傷痕」と同化しているのである。「お母さま」は「ほんもの」でありながら、「私たち」の現在は「いつはり」であり、だからこそ「何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい」とかず子は書くが、ここでの「書くこと」は、いわば「私の」「恥づかしい過去」の根を探ることなのだ。

こうしたかず子主導の「私たち」は、冒頭では直治の言葉を差し挟む事で「お母さま」を「ほんものの貴族」に仕立てたように、直治をめぐる二人の会話の直後に「蛇の話」を挿入し一旦現在を迂回することで補強されていたのではないか。まず「十年前」の父の葬儀に蛇を見たことと「四五日前の午後」に蛇の卵を焼いたことが、「その日」庭に現れた蛇によって関連付けらる。そして、「ああ、お母さまのお顔は、さつきのあの悲しい蛇に、どこか似ていらつしやる、と思」い、「さうして私の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇を、いつか、食ひ殺してしまふのではなからうか」と思い煩うのである。ここで、蛇の卵を「蝮」のものと勘違いしたため燃やそうとしたのだが、間違いだつた「蝮」の方に自らを重ねることに注意したい。『斜陽日記』では「お

母さま」との「美しい」過去は永遠に保存されていた。しかしここでは、言葉のうえだけで存在した「蝮」にかず子自身を重ねて、「いつか」、その「美しい美しい」「お母さま」を食ひ殺すように予感するのである。

さらに見逃せないのが、卵を焼いているのを見て「可哀さうな事をするひとね。」と口にする「お母さま」に対して、かず子が「だけど、ちゃんと埋葬してやつたから、大丈夫。」と切り返すことである。この卵は、燃えないまま埋められたもの、つまり決定的な死が確認されないまま埋められたものであり、にも関わらず「埋葬」したことによってかず子は「お母さま」の「可哀さうな事」という咎めをも回避しようとしているのだ。これらの「蛇の話」は、まさに書かれた「話」として現在へと接続し、そうして一章を通して、徐々にかず子の「私たち」の「恥づかしい過去」という罫の中へと「お母さま」を回収していったのである。かず子にとって、二人の間には「ほんもの」と「いつはり」の区別があるようであり、実は「私の過去の傷痕」の変奏でしかない。その区別もまた直治の言葉を書き綴ることによって生まれたものであり、「お母さま」の死を先取りする予感も「話」を「書くこと」によって獲得されていたのである。中村三春は、他者を「属領化」する「かず子の幻想のあり方」を分析し、「上原がどこまでもかず子の主観が仮構した対象に過ぎな

い」と論じ示唆に富む⁽¹⁾。ただ「お母さま」は、不在の上原と違い、現在もかず子とともに山荘に暮らしているのであり、現に頻繁に起こる会話のずれば、常に「お母さま」の存在感を意識させるものだっただろう。現実の会話の上では、いつまでも「お母さま」は声の主体であり、かず子の求める答えは引き出せない。それゆえ、「お母さま」の不在において密かに「私の」「お母さま」を仮構するために、かず子は一人で「ブランク」に向かって書くという行為を選んだのではないか。それは、言葉から生まれた「喪」のような、「書くこと」の主体の誕生だったのである。

ここまでのことを整理したい。かず子は「書くこと」によって、「恥づかしい過去」の《記憶》を、「いつはり」の現在へと到来させる準備を始めたのである。しかしそれは、どこまでも「私の過去」なのであり、そのためには多層的な迂回を経ながら「お母さま」の「あ。」を仮に「埋葬」し、自らの「ああ。」という掛け声でテキストを埋め尽くす必要があった。この第一章において、『忘却』と《記憶》をめぐる『斜陽日記』との差異は明らかである。『斜陽』では、過去の想起は現在へ向けてなされる。その運動はかず子の「恥づかしい過去」を参照するため、『敗戦』の瞬間のように埋めるべき「ブランク」が単数化することはない。想起する「傷痕」の深度によって、かず子の《記憶》の現在は、複数の過去から触発され続けるの

である。そして同時に、かず子の書く行為は過去ではなく現在に「ブランク」を生み出す。一章は「恋」と書いたら、あと、書けなくなつた。」の一文で唐突に途切れてしまうが、未だ接続する宛先のないままに書かれてしまった文字は、決して《記憶》に埋められることはなく、増殖する「ブランク」として散在していくのだ。

『斜陽』の第一章とは、「お母さま」の過去（あ。）の《忘却》という犠牲によって、「いつはり」に抗うかず子の書く現在が立ち上がるという、両義的な《記憶》の現場であつたのではないか。

三 死と「死蔵」

だとすれば、「書くこと」によって「お母さま」の声から距離を置いたかず子は、いかにして「私の過去の傷痕」に自らを開いていくのか。二人の現在の境遇は、庇護者であつた父の死によって始まつたのは間違いない。だからこそ西片町の屋敷を離れるとき、「お母さま」は「お父さまの亡くなつたこの家で、お母さまも、死んでしまひたいのよ。」と泣き、伊豆に落ち着いた後は「神さまが私をいちどお殺しになつて、それから昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらして下さつたのだわ。」と洩らす。二章で直治の生存が確認されることから、かず子にとって、「お母さま」の埋めるべき「ブランク」は父の死（不在）の一点に集中され表象されていく。そのような「お

母さま」の「復活」に疑いを持ち、「私たち」の現在に「いつはり」を見出すのは、「あ。」の「埋葬」以降のかず子にはたやすいことだろう。

ところで一章では「お母さま」の切り返しから「綺麗な人が早く死ぬ、お母さまは綺麗だ。」と論理が進み、最初に直治の生存を引き出すため「死ぬひとは、きまつて、おとなしくて、綺麗で、やさしいものだわ。」と言ったかず子がまごつく場面があった。しかし第二章では、「お母さま」の方から会話に死を組み入れる。

「夏の花が好きなのは、夏に死ぬつていふけれども、本当かしら。」／けふもお母さまは、私の畑仕事をじつと見ていらして、ふいとそんな事をおつしやつた。私は黙つておナスに水をやつてゐた。ああ、さういへば、もう初夏だ。／「私は、ねむの花が好きなんだけれども、このお庭には、一本も無いのね。」／とお母さまは、また、しづかにおつしやる。／「爽竹桃がたくさんあるぢやないの。」／私は、わざと、つつけんどんな口調で言つた。／「あれは、きらひなの。夏の花は、たいていすきだけど、あれは、おきやんすぎて。」／「私なら薔薇がいいな。だけど、あれは四季咲きだから、薔薇の好きなひとは、春に死んで、夏に死んで、秋に死んで、冬に死んで、四度も死に直さ

なければいけないの？」／二人、笑つた。(二章)

「お母さま」は、「死ぬ」ということと「このお庭」(西片町ではない)には好きな花が「無い」ということを重ねている。これから直治の生存を告げるつもりであるのに、これらの台詞はまず父の不在という一点の「ブランク」を象徴するものであり、同時にかず子との趣味(「グウ」)の違いを強調する場面だ。それに対して、かず子は不可逆的な死を別様に増殖させ循環させるような冗談で切り返している。最初の死をめぐる「お母さま」の切り返しとは対照的であり、死や「無い」を一点に収斂させない。それは戦時をめぐる《記憶》にも当てはまる。

「……」戦争中の、たのしい記憶は、たつたそれ一つきり。思へば、戦争なんて、つまらないものだつた。／昨年は、何も無かつた。／一昨年は、何も無かつた。／その前のとしも、何も無かつた。／そんな面白い詩が、終戦直後の或る新聞に載つてゐたが、本当に、いま思ひ出してみても、さまざまの事があつたやうな気がしながら、やはり、何も無かつたと同じ様な気がする。私は、戦争の追憶は語るのも、聞くのも、いやだ。人がたくさん死んだのに、それでも陳腐で退屈だ。けれども、私は、

やはり自分勝手なのであろうか。私が徴用されて地下足袋をはき、ヨイトマケをやらされた時の事だけは、そんなに陳腐だとも思へない。

(二章)

かず子にとって「ブランク」は一点ではない。『斜陽日記』の静子ならば「人がたくさん死んだ」ということを忘れないため、より密に「ブランク」を埋めていくだろうが、かず子はそれらの死とは別の位相で、「無かった」という過去の「ブランク」を増殖させていくのだ。しかしこの「ブランク」は無際限であるからこそ、決して単線的な書き込みはなされないものであり、逆にかず子は、「お母さま」には死や「無い」ことを喚起させる「このお庭」で、「戦争の唯一の記念品」である「地下足袋」を履き、現在、畑仕事をしているのだ。いわば《忘却》の持統の中で、かず子は「書くこと」から引き出された現在の「ブランク」を模索しているのである。一章で得たまま宙吊りになっていた「恋」という文字は、二章では「ひめごと」という言葉へと変化している。それは不可逆的な死ではなく、卵のまま「埋葬」された「過去の傷痕」を再び露にすること——無数の「ブランク」のただ中に、現在を貫いていく「ひめごと」を見出すことなのではないか。

三章では、そうしたかず子の重ね置かれた過去と現在の在り方が

顕著になる。まず「不安」のために「編物を續けてゆく事が出来なくなつた。」と語られるが、この「編物」に注目したい。『斜陽日記』では、冒頭近くの箇所て静子は戦時下の銀座へと洋裁に通い始め、「お母さまは大へん洋裁のおけいこをお喜びになつて」いるとある。「お母さまにとつては、文学の勉強などよりも、女らしい洋裁のおけいこの方が、どんなにか嬉しかつた」からであり、『斜陽日記』全体を通して、常に母・娘の一体感を現す小道具として「編物」は登場している。ところが『斜陽』のテキストでは、この習い始めたときのエピソードを削り、その代わりに多くの場面で編物や織物に纏わるエピソードや表現を織り込んでいる。例えば山木との離婚については、「ドレスの生地を間違つて裁断した時みたいに、もうその生地は縫ひ合せる事も出来ず、全部捨てて、また別の新しい生地の裁断にとりかからなければならぬ。」とある。また、滑稽なほど丁寧な医者の「白足袋」を繰り返し注視し暗に「地下足袋」と対比したり、生活のため思い出の服を売ることになったり、また五章で上原と結ばれる前に「お父上の外国土産の生地で作つたビロードのコート」を脱いだりと、それらはかず子の意識／無意識をほのめかす織物（テクスチャー）として、言葉（テキスト）に連動している。三章はそうした「編物」のエピソードから始まる。

「…」この淡い牡丹色の毛糸は、いまからもう二十年も前、私
 がまだ初等科にかよつてゐた頃、お母さまがこれで私の頸巻を
 編んで下さつた毛糸だつた。「…」私は、いよいよ恥づかしくな
 つて、もうそれからは、いちどもこの頸巻をした事が無く、永
 い事うち棄ててあつたのだ。それを、ことしの春、死蔵品の復
 活とやらいふ意味で、ときほぐして私のセエタにしようと思つ
 てとりかかつてみたのだが、どうも、このほやけたやうな色合
 ひが気に入らず、また打ちすて、けふはあまりに所在ないまま
 ふと取り出して、のろのろと編みつつけてみたのだ。けれども
 編んでゐるうちに、私は、この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨
 空と、一つに溶け合つて、なんとも言へないくらゐ柔かくてマ
 イルドな色調を作り出してゐる事に気がついた。

(三章)

ここで、先ほどの花をめぐる会話では平行線だつた「ゲウ」が、
 「死蔵品」を媒介に遅れて初めて伝わる事が重要である。この後
 かず子は「私がこの色の美しさを、本当にわかるまで、二十年間も
 この色に就いて一言も説明なさらず、黙つて、そしらぬ振りして待
 つていらしたお母さま。」と感謝の念を露にするが、この「待つてい
 らしたお母さま」は、現在生きている「お母さま」とは別様に、過
 去から現在へと「復活」したのである。それまでは「恥づかしい過

去」のために「死蔵」され、ある一つの「ブランク」になつていた
 のだ。それを解きほぐし「私のセエタ」として編み直す瞬間に、無
 数の過去の裡の一つが、出来事として到来したのである。「戦争の唯
 一の記念品」にせよ、この「死蔵品」にせよ、かず子は現在の生の
 営みの中に、なるべく慎重に現在へと到来する過去を組み入れてい
 く。二つのエピソードとも、幾分は現在をしたたかに維持するため
 の過去でさえあるだろう。しかし、徹底した「恥づかしい過去」が
 突然到来することもある。それは、原産国が《忘却》された薔薇が
 初めて咲いたときのエピソードだが、「私は、いま気がついた。」と
 大袈裟に騒ぐかず子に対して、「お母さま」が口を挿む――

「…」お勝手のマツチ箱にルナルの絵を貼つたり、お人形
 のハンカチーフを作つてみたり、さういふ事が好きなのね。そ
 れに、お庭の薔薇のことだつて、あなたの言ふことを聞いてゐ
 ると、生きてゐる人の事を言つてゐるみたい。」／「子供が無い
 からよ。」／自分でも全く思ひがけなかつた言葉が、口から出
 た。言つてしまつて、はつとして、まの悪い思ひで膝の編物を
 いぢつてゐたら、／――二十九だからなあ。／そうおつしやる
 男の人の声が、電話で聞くやうなくすぐつたいバスで、はつき
 り聞えたやうな気がして、私は恥づかしさで、頬が焼けるみた

いに熱くなつた。

(三章)

子供の「死産」という過去は、すでに一章で書かれていたが、それが不可逆的な死としてではなく、「無い」という「ブランク」として現在の言葉になったとき、「編物」のような母・娘の「グウ」とは異質な「男の人の声」が、「電話」を通して極度の「恥づかしさ」を喚起したのである。薔薇の花が咲いたエピソードもまた、本来ならば広大な「ブランク」である「このお庭」に「記念品」(地下足袋)がもたらした、初めての象徴的な「復活」になるはずだったのでないのか。しかし直治が復員したとき「わあ、ひでえ。趣味のわるい家だ。」と言って「グウ」を相対化したことと同様に、どんなに小物や人形や薔薇を「生きてゐる人」のように扱っても(また薔薇によつて人の死の循環を喻えても)、もう、「子供が無い」という新たな現在の「ブランク」が「埋葬」されることはないだろう。「私たち」の「いつはり」は直治に曝されることではつきりと露呈し、「恥づかしい過去」の深度は進んだのだ。

だからこそ、かず子は再び「あ。」と口にして、直治の「蔵書やノートブックなど一ぱいつまつた木の箱五つ六つ」の中から「夕顔日誌」を拾い出すのだ。それは、「ひめごと」の「記憶」を、新たな現在の「ブランク」へと到来させる契機となつた。「恋」の一文字に始まっ

た「書くこと」による「ひめごと」の増殖は、「夕顔日誌」という新たな「死蔵品の復活」を経て、上原への手紙という形を取るのである。

四 《記憶》／《忘却》の斜影

かず子の新たな「ひめごと」は、「お忘れかしら。お忘れだつたら、思ひ出して下さい。」と、《忘却》されていることを恐れながら開始される(四章)。だが上原からの応答がないことで、かず子の中の「ブランク」は二通目、三通目と増殖し、五章では「何の手応への無いたそがれの秋の広野に立たされてゐるやう」になる。そして「お母さま」の病状が悪化する中、最後の「あ。」を夢の中で経験するのである。

「……霧の庭に、アヂサキに似た赤い大きい花が燃えるやうに咲いてゐた。子供の頃、お蒲団の模様に、真赤なアヂサキの花が散らされてあるのを見て、へんに悲しかつたが、やつぱり赤いアヂサキの花つて本当にあるものなんだと思つた。」「／＼お母さまは、どうなさるのかしら。」「／＼／＼「あのお方は、お墓の下です」／と答えた。／「あ。」／と私は小さく叫んだ。さうだったのだ。お母さまは、もういらつしやらなかつたのだ。お

母さまのお葬ひも、とつくに済ましてゐたのぢやないか。ああ、お母さまは、もうお亡くなりになつたのだと意識したら、言ひ知れぬ凄しさに身震ひして、眼がさめた。

(五章)

この「あ。」は何だろうか。現実ではまだ生きている「お母さま」の死後の出来事であり、しかもその死を一度は《忘却》しているのである。「あ。」は「恥づかしい過去」が現在に到来したとき発せられるものだとかず子は考えた。だがその確信は、一章において「お母さま」の「あ。」を「埋葬」しながら、そのときの「傷痕」そのものを「書くこと」の裡に《忘却》することで成立したものである。

ここで「意識」されたのは、すでに「お母さま」は自らの言葉（テキスト）で「埋葬」したという過去の唐突な回帰だったのではないか。それは、「死蔵品」の中で「私のセエタ」になるまで「待つていらしたお母さま」と表裏一体であらう。織物（テクスチャー）の「模様」でしかない「赤いアヂササの花」が生を受けていることもと連動する。かず子は会話の中で死と生の反転を両義的に扱ってきたが、この夢では織物や言葉に象徴的な生や死の往還が映し出される。そうした「意識」の回帰から、最後の「恥づかしい過去」の到来までの距離は近い。その唐突な到来が、現在の読書のただ中であることは必然だったのかもしれない。

「あなたは、更級日記の少女なのね。もう、何を言つても仕方が無い。」／さう言つて、私から離れて行つたお友達。あのお友達に、あの時、私はレニンの本を読まないで返したのだ。「……」／私は恥づかし／「ごめんなさいね。」／と小声でわびて、お茶の水駅のはうに歩いて、振り向いてみると、そのお友達は、やはり橋の上に立つたまま、動かないで、じつと私を見つめてゐた。「……」／あれから十二年たつたけれども、私はやっぱり更級日記から一步も進んでゐなかつた。いつたいまあ、私はそのあひだ、何をしてゐたのだらう。

(五章)

結局「恥づかしい過去」の底とは、今までの自分の過去の全てが「更級日記」のような言葉（テキスト）に囲まれたものだったと「意識」することであり、「ブランク」を増殖させ続けて到来した「私の」過去と「私の」現在の連続が、なおも「ブランク」であつたことに逢着したのである。そしてここに初めてかず子の中で戦中と戦後が連続する。「革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまはしいもの」として「戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言ふ事の反対のはうに本当の生きる道があるやうな気がして来」たこと——それは「言ふ事の反対」とあるように、

やはり「更級日記」のままに言葉（テキスト）の圏域にあるのかも
 しない。しかし表象を別様に捉え返す瞬間が、自らが埋めるべき
 「ブランク」を見出す出来事になりうるのであり、「陛下のお写真」
 という「記念品」に「解放」を見るかず子は、すでに「恥づかしい
 過去」の到来を待つだけではない。

六章では「聖書」を「ブランク」そのものである「私の」現在へ
 と引用し、上原の「奥さま」に会った後も「戦闘、開始、恋する、
 すき、こがれる、本当に恋する、本当にすき、本当にこがれる、恋
 ひしいのだから仕様が無い、「…」と自らの言葉を過剰に駆動させ
 言葉そのものになりながら「進んで」いく。高田知波は、「道徳革
 命」の実体ではなく「自己表現としての「革命」という言葉」を
 獲得するかず子の試みを鋭く論じた。⁽¹³⁾ 現在が現在に接続される「恋
 と革命」とは、決して過去によって現在に「犠牲者」を強いないこ
 とである。一章でかず子は、「私の過去の傷痕」のため、現在におい
 て「お母さま」の過去（「あ。」）を《忘却》した。その「あ。」の《記
 憶》が夢で回帰したことを契機として「恥づかしい過去」の底にま
 で触れ、初めてかず子は無数の「ブランク」が貫流する過去を、現
 在の裡に《記憶》したのである。しかし現在はまだ、その現在の循
 環のために「犠牲者」を強いるだろう。そこに、『斜陽』をめぐる問
 いが、もう一つ残っているのではないか。

直治の遺書——そこには「僕は、家を、忘れなければならない。」
 とあり、「兵隊の時に、手にいれておいた」葉で死ぬ旨が書かれてい
 る。

姉さん。／僕に、一つ、秘密があるんです。／永いこと、秘
 めに秘めて、戦地にゐても、そのひとの事を思ひつめて、その
 ひとの夢を見て、目がさめて、泣きべそをかけた事も幾度あつ
 たか知れませんか。『…』／でも、僕は、その秘密を、絶対秘密の
 まま、たうとうこの世で誰にも打ち明けず、胸の奥に藏して死
 んだならば、僕のからだが大葬にされても、胸の裏だけが生臭
 く焼け残るやうな気がして、不安でたまらないので、姉さん
 だけ、遠まはしに、ほんやり、フイクションみたいにして教へ
 て置きます。
 （七章）

これまでは、「ひめぐと」はかず子の現在の生だけに限られてい
 た。ところが、直治の遺書という形の中に、別様の「ひめぐと」が
 遅れて現れてきたのである。この遅れが重要であり、それは「私の
 セエタ」へと編み直すときに「お母さま」の「グウ」を二十年遅れ
 て受け取ったことも共鳴する。現に直治もまた、かず子による編
 み直しの中で、遅れて「グウ」を受け取ろうとしていたことが、遺

書（テキスト）を通して、さらに遅れてかず子へと伝わるのである。

それから、一つ、とてもてれくさいお願いがあります。ママのかたみの麻の着物。あれを姉さんが、直治が米年の夏に着るやうにと縫ひ直して下さつたでせう。あの着物を、僕の棺に置いて下さい。僕、着たかつたんです。

（七章）

「着物」は直治のもとへ「埋葬」されるだろう。しかし「胸の奥に蔵して死」ぬことを拒まれた「秘密」はどうすればいいのか。かず子は、ただ「埋葬」すれば終わるわけではない過去からの声を聞き入れざるをえない。それは、死ではなく、「死蔵」への遺志だったのではないだろうか。ここには、かず子とはまた違った戦中／戦後の持続があり、現在に《忘却》され過去になっていくことを選んだ直治の「ひめごと」が、言葉（テキスト）を通して、かず子の「胸の奥」で「復活」するのだ。そしてかず子は、上原に「最後の手紙」を出す――

どうやら、あなたも、私をお捨てになつたやうでございます。いいえ、だんだんお忘れになるらしいございます。「…」／あなたが私をお忘れになつても、また、あなたが、お酒でいのちを

お無くしになつても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けさうです。「…」／それは、私の生れた子を、たつたいちどでよろしうございますから、あなたの奥さまに抱かせていただきます。さうして、その時、私にかう言はせていただきます。／「これは、直治が、或る女のひとに内証に生ませた子ですの。」／なぜ、さうするのか、それだけはどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身にも、なぜさうさせていただきたいのか、よくわかつてゐないのです。「…」／これが捨てられ、忘れかけられた女の唯一の幽かないやがらせと思し召し、ぜひお聞きいれのほど願ひます。

（八章）

この手紙には、不自然なほど、上原に自らが《忘却》されるかのような表現が散見される。かず子は、自らの「ひめごと」である「恋の成就」までは、「私の過去の傷痕」（実は「ブランク」）のみを現在に接続し、他のあらゆることを「ブランク」に還元し《忘却》してきた。しかし「ひめごと」は成就した瞬間に消えてしまい、遅れて「恋があらたによみがへつて来た」ことも経験していたのだ（第六章）。「たつたいちど」とあるが、「ひめごと」の成就のたびに新たな「ブランク」は生じるのであり、かず子も「第二回戦、第三回戦をたたかふつもり」と記す。同時にかず子は、「私の」「ひめごと」で

はない直治の「ひめごと」に遭遇し「かたみ」分けすることで、「過去の傷痕」の複数性を「書くこと」において初めて《記憶》しているこの「最後の手紙」も、いつか「死蔵品」として《忘却》されるものであることを意識している。しかしまた、だからこそ、いつか遅れて「死蔵品の復活」を遂げるために、一度は《忘却》される形をとることを受け入れているとも言えるのだ。

それは、この「最後の手紙」にいつか触れる誰かに新たな「ひめごと」を生じさせる契機になるかもしれない。「復活」するために「埋葬」されること。この手紙には初めて日付けが入れられたが、持続する現在を生きるかず子にとってもまた、過去の《記憶》の断片として、だんだん《忘却》され遠ざかっていくものなのだろう。「お母さま」の「あ。」の声は「埋葬」された。かず子が「お聞きいれ」を願うこの声も同様だろう。しかしそれは神西清が評したように「どこからともなく」回帰してくるものだ。直治は遺書の中で「ママ」「お母さま」と「スガちゃん」を重ね合わせている。それもまた直治による「復活」でしかない。だがどこまでも複線化される「死蔵品」としての過去が、複数の「私」において現在に「復活」を遂げ、その現在も再び複数の「私」に《忘却》されていく螺旋——そこにこそ『斜陽』の、決して戦中／戦後の「ブランク」を単線化し

えない、重ね置かれた《記憶》の生があったのではないか。

注(1) 山崎正純『「斜陽」—敗戦後思想と「革命」のエスキス』（『国文学』二〇二・一一）

二〇二・一一）

(2) 丸川哲史『Postwarと太宰治』（『ユリイカ』一九九八・六）

(3) P・リクルは『記憶・歴史・忘却』上・下（久米博訳 二〇〇四・八／〇五・五、新曜社）において、生の特異点である「個人的記憶」と歴史記述のような「集会的記憶」との断裂に対して、ベルクソン／フロイトを援用しながら「痕跡の存続」である「保留された忘却」による接続を試みており、大変示唆的である。

(4) 須多章「太宰治・斜陽（新潮誌連載中）」（『東北文学』一九四七・一一）

(5) 香川明「『斜陽』その他」（『若草』一九四七・一一）

(6) 伊藤整「『斜陽』と「処女懐胎」（『人間』一九四八・二）

(7) 神西清「斜陽の問題」（『新潮』一九四八・二）

(8) 小森陽一「解説」（太田静子『斜陽日記』一九九八・六、小学館文庫）

(9) 坪井秀人「講演 女の声を盗む——太宰治の女性告白体小説について——」（『剽窃・模倣・オリジナリティ——日本文学の想像力を問う——』二〇〇四・三、国文学資料館）

(10) 島村輝「『書くこと』への意志——『斜陽』の記述の構造——」（『梅田鉄夫編「太宰治 第八号」一九九二・六、洋々社）

(11) 中村三春「斜陽」のテクニクスと「革命」——属領化するレトリック（『国文学』一九九九・六）

(12) 石井洋二郎「闘争する身体 太宰治『斜陽』を読む」（『身体小説論——漱石・谷崎・太宰——一九九八・一二、藤原書店）に、「他者としての弟」について鋭い分析がある。

(13) 高田知波「『斜陽』論——ふたつの『斜陽』・変貌する語り手」（『国文学』一九九一・四）